

氏名（本籍）	趙陽（中国） <small>じやお やん</small>
学位の種類	博士（社会福祉学）
学位記番号	甲 福第 21 号
学位授与年月日	平成 30 年 3 月 17 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項
論文題目	児童虐待の予防と育児の社会的支援に関する一考察 —中国瀋陽市における 0～6 歳児の育児の社会的支援を中心として—
論文審査委員	主査 蓑毛 良助 教授 教育学修士(東京学芸大学) 副査 中山 慎吾 教授 社会学博士(筑波大学) 副査 田畑 洋一 客員教授 博士(文学 東北大学) 副査 高山 忠雄 元教授 教育学博士(東北大学) 副査 門田 光司 教授 (久留米大学) 博士(社会福祉学 同志社大学)

内容の要旨

1. 問題の所在

現代社会は急速に少子高齢化が進み、社会基盤の脆弱化が懸念される一方で、これまでに経験のない事態につぎつぎと迫られ、国民の安心安全な生活がもはや行政だけに頼ってはいては手に入れられない時代になった。このような背景から、個人のライフスタイルや価値観の多様化といった子どもと家庭を取り巻く環境が著しく変化し、子育てに対する無理解、孤立化による過保護や過干渉、育児不安や子ども虐待といった子どもと保護者を巡る問題が発生し、これらは各国共通の社会問題となっている。

こうした問題に対して、日本では少子化への危機感から、保護者が子育てについての第一義的な責任があるという基本的認識の下に、次代の社会を担う子どもが健やかに生まれ、かつ育成される環境の整備をするため、国・地域団体・企業・国民の責務を明確にし、子育て支援策を打ち出してきた。また、母親の「育児不安」という問題を背景に、地域の子育て支援が着目されている。さらに、ママ友の間で互助が生まれ、子育て家庭の自助を補完する手段として、公助・共助・互助の混合活用による支援構造が見えている。

一方中国では、子育て支援は、家族・親族間での相互援助、託児施設の充実、中高所得層でのベビーシッター利用などがあるが、まだ政策的課題としては浮上していない。しかし、産業化と都市化の進展に伴い、家族力の低下は避けられない。

また、近隣関係が希薄化し、地域住人にとって地域という場が存在してもコミュニティという地域関連を基盤にした生活の場としての認識は薄れている。核家族や家族規模の縮

小化により、特に子どもの乳幼児期においてはその負担が母親に集中してきた。母子が密着した育児における母親の育児不安、子どもの社会化過程における社会関係の欠如等、母親及び子ども双方にとって好ましくない状況を生み出してきたし、虐待も発生しやすくなってきた。よって、育児の社会支援が必要となっている。

2. 研究の課題

本研究は、問題の所在から、子どもの心身の健全な発達と虐待の予防に関して、育児の社会的支援が重要であると考えられた。そこで、まず、虐待のハイリスクの母親への育児の社会的支援が必要であることを確認する。次に、中国(瀋陽市)における育児の社会的支援の現状と対策について3つの研究仮説を設定した。1つ目は、育児の社会的支援の実態を家族形態別に検討し、アンケートのデータを収集し、全体として育児の社会的支援を求めているが、家族形態別によって求める支援の内容は異なる(仮説1)。2つ目は、母親の就労タイプ別に検討し、データを収集し、全体として育児の社会的支援を求めているが、母親の就労タイプ別によって求める支援の内容は異なる(仮説2)。3つ目は、育嬰師の専門性の構造を分析して、育嬰師が育児の社会的支援に貢献している(仮説3)。これらの3つの研究仮説から、児童虐待の予防に関して母親の育児の社会的支援が重要であることを確認し、中国(瀋陽市)における育児の社会的支援の現状と対策について検討することを研究の目的とする。

本研究の方法は、文献による研究とアンケートとインタビュー調査である。研究の方法については、倫理的配慮を行うとともに、「鹿児島国際大学教育研究倫理審査委員会」の承認のもとに実施した。

アンケート調査による調査方法は、中国遼寧省瀋陽市の各幼稚園・社区を通じて調査票を配布し、回答を依頼した。調査は子どもを持つ保護者を対象とした調査から得られたデータを分析し、調査結果と先行研究から総合的に分析した。インタビューによる調査方法は、中国遼寧省瀋陽市の育嬰師の派遣会社を通じて、5人の在職中の育嬰師を対象とした調査から得られたデータを分析し、調査結果と先行研究から総合的に分析した。

インタビューなどの質的調査に関しては、調査目的や方法、結果の公開などについては詳細に説明し、プライバシーに配慮し名前などが特定されないよう十分に留意した。結果の分析などから得られたデータは、本研究の目的以外には使用しないこととし、同意を得て協力を依頼した。調査票に同封した調査依頼文書に、調査の目的、調査で得たデータの取り扱いを厳重にし、勤務先や個人名が特定されないよう十分に配慮することとした。いずれの調査も、無記名回答とし、カギのかかる保管庫に5年間厳密に保管し著者の責任で破棄する等、個人情報保護の観点の意味からも厳重に取り扱った。

3. 本論文の構成と特徴

本論文は、次の8章からなる。

はじめに テーマ設定の理由、従来の研究、問題の所在、研究の課題、研究の目的、3つの仮説を明示した。

第1章 子育て支援の先行研究の動向と日中の子育て環境

子育て支援の先行研究を日本と中国の文献を整理すると共に、日中の子育て環境の現状を分析した。

第2章 児童虐待と社会的支援—日中比較

児童虐待のタイプ、児童虐待の発生原因を整理すると共に、社会的支援が加わることで予防できるかを日中で比較検討した(文献研究)。

第3章 中国における母親の育児の社会的支援

中国における母親の育児の社会的支援の現状を分析した(文献研究)。

第4章 中国における育児の社会的支援と虐待予防

中国における育児の社会的支援が、虐待予防につながっているかを分析した(文献研究)。

第5章 育児の社会的支援等に関する家族形態別の分析

育児の社会的支援等に関して家族形態別に分析した(アンケート調査)。

第6章 育児の社会的支援等に関する母親の就労タイプ別の育児の分析

育児の社会的支援等に関して母親の就労タイプ別に分析した(アンケート調査)。

第7章 育嬰師による育児の社会的支援

育嬰師による育児の社会的支援の現状と社会的貢献度を分析した(面接調査)。

第8章 総合考察

本研究の結果から、3つの仮説を検討し確認した。今後の課題についても明示した。

謝辞

今回の論文作成過程で田畑洋一客員教授、中山慎吾教授に研究上の支援を頂いたことに感謝したい。

引用文献・参考文献

- ・木村純(2005)。「子ども虐待ソーシャルワーク論—制度と実践への考察」東京:有斐閣。
- ・劉郷英(2013)。「中国における乳幼児教育・保育の動向と保護者養成改革の現状と課題に関する検討」福山市立大学教育学部紀要, 1(1):135-147. 他

資料

4. 仮説の確認と今後の課題

本研究の中国のアンケート調査の結果から、次のようなことが確認された。児童虐待の予防の為には、総合的な育児の社会支援が必要と考えられた。アンケートの結果では、母親が他の保護者より圧倒的に多く育児に参加していて、育児支援の具体的な内容としては「赤ちゃんの世話」・「子育て相談」・「悩みの相談」が多く、これに答えてゆくことが必要

であると考えられた。一人っ子政策のため親が未熟であることが多いことも考えられるので、子どもの発達に関する知識や経験などが不足している保護者も多い。伝統的な祖父母による子育てという考え方も多く、祖父母に育児支援を期待しているが、親たちの有職、祖父母の高齢・病弱・伝統的な子育て方法に難点があるなどの理由で、専門家による育児の社会的支援が必要であると考えられた。

家族形態別に分けて見ると、核家族は、親族と別居という不利な条件の為、全て外部に委託する育児の社会的支援を求めている。一方、祖父母を含む直系家族は、祖父母世帯と若夫婦が同居をしている条件で、家族・親族というネットワークを持ちながらも、出産・育児支援を外部に委託する育児の社会的支援を求めている。従って、全体として育児の社会的支援を求めているが、家族形態別によって求める支援の内容は異なると考えられた。よって、仮説1は確認された。

母親の就労タイプ別に分けて見ると、専業主婦には、家事や育児に縛られ、社会的活動からの疎外感を持つ為、苦悩は単に談笑できる仲間をもつことで解決されるものではなく、在宅育児への支援や地域活動や再就職を通して社会的、経済的自立の道を助ける育児の社会的支援の大切さが示唆された。また、自営業・正規雇用・短期就労の母親には、ある程度社会的活動をしているが、勤務形態や勤務時間帯の多様化の為、仕事と子育てを両立させる為には、通常の保育に加え、低年齢児保育や延長保育・特定保育(保育期間を柔軟に選択できる)を普及させることが必要であると考えられた。病気など子どもの面倒をみられない場合に備え、病児保育の体制を整備することに応じてゆくことが必要であると考えられた。従って、全体として育児の社会的支援を求めているが、母親の就労タイプ別によって求める支援の内容は異なると考えられた。よって、仮説2は確認された。

育嬰師のインタビュー調査から見ると、育嬰師は、この仕事が育児の社会的支援に貢献しており、達成感を得て、特に、この仕事を肯定的に捉えており、子どもの身体、視覚、聴覚、知能、言語、情緒、社会性の育成にはとても役に立つと考えている。よって、仕事の継続意識も強いと考えられた。

管理機関が育嬰師の国家試験で、育嬰師としての一定の専門性の水準を保ち、施設や教育道具などを充実させ、勤務時間を適切に調整すること、待遇を良くすること、研修制度を充実させること、時に複数の育嬰師が共同で共学しながら育児をすることなどで、育嬰師のレベルが向上し、育児の社会的支援にさらに貢献できると考えられた。よって、仮説3は確認された。

5. 研究の意義と課題

本研究の結果として、児童虐待の予防の為には、総合的な育児の社会手支援が必要である。家族形態別・母親の就労タイプ別によって求める社会的支援の内容は共通点と相違点があった。各人・各家庭の個人差に柔軟に対応できるのは育嬰師であることが明らかとな

った。

今後の課題として、関係者への詳細な面接を通して、各人、各家庭が求めている育児の社会的支援の内容をより詳細に明らかにすることである。このことが実現した時、各家庭や育嬰師・専門機関がどういう形で連携していくことが良いかが明らかとなり、育児の社会的支援の全容が明らかになると考えられた。このような連携された育児の社会的支援が実現する時、虐待の予防も可能であると考えられた。

審査結果の要旨

1. 研究の継続性

筆者は、中国の大学を経て日本に語学留学した。その後、志學館大学人間関係学部心理臨床学科を卒業後、児童福祉学の研究を志し、平成21年4月に鹿児島国際大学大学院福祉社会学研究科博士前期課程に入学し、平成23年3月に修了した。平成23年4月に鹿児島国際大学大学院福祉社会学研究科博士後期課程に入学した。一貫して、児童の健全育成と育児の社会的支援に関して研究してきた。

博士前期課程の修士論文では、児童虐待のハイリスクの母親の分析と児童虐待の予防の社会的支援について研究した。博士後期課程の博士論文では、児童虐待の予防と育児の社会的支援に関して文献研究・アンケート調査・面接調査から得られた結果を3つの仮説から検討した。学会における研究活動(研究発表、論文投稿)も精力的に行い、本研究化の博士論文提出要件をクリアした。その間、日本語学習、研究活動、経済的自立等で奮戦した。

2. 論文の完成度

本研究において、先行研究から子どもの心身の健全な発達と虐待の予防に関して、育児の社会的支援が重要であると考えた。そこで、まず、虐待のハイリスクの母親への育児の社会的支援が必要であることを確認する。次に中国(瀋陽市)における育児の社会的支援の現状と対策について検討し、3つの研究仮説を設定した。仮説1は、家族形態別によって求める支援の内容は異なる。仮説2は、就労タイプ別によって求める支援の内容は異なる。仮説3は、育嬰師が育児の社会的支援に貢献する。これらの3つの研究仮説を、文献研究、アンケート調査、面接調査で検討し確認した。文献研究、アンケート調査、面接調査を駆使して取り組み育児の社会的支援の現状と対策、さらに3つの仮説を確認し、研究の目的に対応した結果を出せたことは評価できる。特に乳幼児の社会的支援として、育嬰師に注目して、その貢献を確認できたことは評価できる。現在、富裕層に限られている育嬰師の活用が、今後普及することを示唆している。よって、本論文完成度は決して低くない。

3. 本論文の特徴・評価

本論文では、①先行研究より、育児の社会的支援が子どもの心身の健全な発達と虐待の予防に有効であることを鮮明に示し、②中国(瀋陽市)でのアンケート調査結果より、育児の社会的支援は、家族形態別によって、また、就労タイプ別によって、異なることを確認し、③面接調査から、育嬰師が育児の社会的支援に貢献していることを示している。ここに本論文の特徴と独創性がある。従って、本論文は、育児の社会的支援に育嬰師の活用など開拓的研究に挑み、3つの仮説を確認したことは、児童福祉学の発展に寄与し得る学術的意義を有し評価できる。

以上の理由により本研究科が博士の学位の条件としている「研究者としての自立性」「専門研究の独創性」等の条件に満たしていると判断し、審査委員会は全会一致で博士学位論文審査において合であると評価した(平成30年・2018年3月)。